

オランダのうさこちゃん

—うさこちゃん絵本に現れるオランダの子育て観

A little rabbit (Nijntje) in the Netherlands —the Dutch way of parenting expressed in “Nijntje” series

松浦 真理*

Matsuura Mari

本稿の目的は世界中で60年以上愛されてきた「うさこちゃん」シリーズ絵本について、一般に言われている特徴を概観するだけでなく、オランダの家庭観や子育て観が内容によく表現されていることを示すことである。まず、絵本としての一般的特徴と子ども向け絵本としての特徴、動物絵本としての特徴を先行研究から整理して、どのような絵本であるのかを示す。その上で、この絵本に作者の心情やオランダの社会が投影されているだけでなく、オランダの家庭の在り方や子どもに対する親の態度や役割がその文章表現に明示されていることを文例から明らかにした。

はじめに

「うさこちゃん⁽¹⁾」シリーズ絵本（以下、うさこちゃん絵本）はオランダの作家ディック・ブルーナ（以下、ブルーナ）によって1955年に初版がだされ、日本では1964年に福音館書店から「子どもがはじめてであう絵本」として出版された。現在の学生の祖父母世代が親世代に読み聞かせたであろう時代から続いているベストセラーであり、種々のキャラクターグッズを通して多くの日本人がなじんでいる子うさぎが主人公の絵本である。

うさこちゃん絵本は、小さめの真四角のサイズであること、原則として4色のみが使われるシンプルな絵で描かれていること、1冊12枚の絵に短いストーリーで構成されていることなどから、子どもにとってわかりやすい絵本として書店ではほとんどの場合乳児向けコーナーに配されている。うさこちゃんシリーズにミッフィーシリーズも加えて、2017年時点で累計5000万部以上の販売実績があり、32タイトル⁽²⁾出されているが、ストーリーそのものを詳しく知られているよりも、キャラクターとして知られている印象が否めない⁽³⁾。

一方で、絵本の知名度とブルーナ自身の日本とのつながりの強さから、絵本の背景紹介は雑誌やテレビなどで頻繁に取り上げられ、そこでは絵のデザイン性やブルーナ自身の人生と絵本とのつながりについて語られることが多い⁽⁴⁾。本には一般に著者の人生観や生活経験が反映されるのは自然なことだろうし、ブルーナ自身がマティスの影響を受け、ブックカバーデザイナーとしても有名であることから、絵のデザイン性について語られるのもうなずける。

上述したことからわかるように、ブルーナの親しみやすい人柄を反映した、わかりやすく暖かみがある乳児向けの絵本、デザイン性にすぐれていることで登場人物がキャラクター化しやすい絵本だといえるが、そのような特徴だけの絵本なのだろうか。世界50カ国以上で翻訳出版されていることから、世界のどんな子どもたちにも当てはまる、普遍性のある日常生活が描かれていることは

* 帝塚山大学 教育学部 教授

事実だろうが、この絵本にオランダ社会固有の価値観が色濃く反映されていることはあまり語られない。

本稿ではうさこちゃん絵本の特徴を先行研究から概観した上で、主として教育的な観点からオランダ社会の価値観が投影されている点を明らかにする。

1. 絵本としての特徴

本節ではうさこちゃん絵本の全体的な特徴について概観し、子ども向けであること、および動物絵本であることについても特徴を整理する。

1-1. 絵と文の特徴

ここでは、まず絵本とは何かを確認しておく。動物絵本を多角的に捉えた矢野は、著名な児童文学者で福音館書店の編集者としてブルーナの絵本を日本に紹介した松居の考えも取り入れながら次のように論じている。すなわち絵本は「絵と文章とが有機的に結合したもの」であるという。これを詳しく「表象と言語という異なるレベルの意味の表現形式である絵と文章とが、それぞれにおいて完結することなく、お互いに向けて開かれ、それぞれに相手の意味をより一層深く照らし出すように仕掛けられた、立体的でトータルな表現形式である。・・・絵本は、絵と文どちらか一方が欠けたときには、不完全なものになるとまではいえないまでも、その表現の深さが低減してしまうようなものといえよう。」⁽⁵⁾と述べている。つまり、絵本は単純にストーリーにわかりやすさのための絵がついているだけではないし、絵の説明としてのストーリーがつけられているというだけのものではないということである。絵本のこの奥深い特徴ゆえに、子どもだけでなく大人もその魅力に引き付けられる。また、大人向けに書かれた絵本も数多い。

うさこちゃん絵本の絵と文の関係はどうだろうか。ブルーナ自身はその関係について次のように語っている。「・・・絵と文とは一枚の布を織る糸のようなものかもしれません。二つの要素がおりこまれながらやがて一冊の絵本が出来上がっていくという感じなのです。」⁽⁶⁾

意外かもしれないが、あのシンプルな絵のために、彼は必ず動物園で正確なスケッチをし、無駄なものをぎりぎりまでそぎ落とすような作業をしている。同時に、何百枚を超えるスケッチを書いている。このシンプルなうさぎ1匹についても単に強調したいところをデフォルメしているだけではないということである。（じつはうさこちゃんの輪郭は、ペンではなく筆で少しずつ、点を描くような感じで描いている。輪郭が滑らかでなく、ごく細かいギザギザの線になっているのはそのせいである。）口元のペケ印も、自身が幼いころに出会ったうさぎの口がこのような形にみえたことによっている。また、絵の特徴として松居直は「寂しさがいいんですよ。うさこちゃんをひとりだけ、ぽつんと描いていても。」と評し⁽⁷⁾、このうさぎがシンプルであっても決して単独で孤立しているのではなく、自分の思いを持ち、家族や友人のいる「人格」をもっているのだということを思い出させてくれる。ブルーナは、文は絵を描いているうちに浮かんでくるようで、子どもが自分の話を聞いている場面を思い描がきながら考えるという。1枚の絵に対して4行で構成されていて、2行目の文末と4行目の文末の語は韻を踏んでいるリズム感のある文となっている⁽⁸⁾。さらにそれを声に出して何度も朗読しながらつくるといふ。日本語版の文は石井桃子や松岡享子による訳文であるが、このような原文の特徴をできるだけ忠実に訳していると考えられる。たとえば、次のような表現をみるとわかる。

.....

つくれる つくれる あたし いいこと

かんがえた。 これで ねずみを つくろうと。

『うさこちゃんとあかちゃん』より。

「いいことを考えた、これでねずみをつくりましょう」という正確な日本語よりも、テンポ感を感じる訳文である。文の中には、会話的な部分があれば、語りの部分もあるが、それらが地の文で入り混じっているのに不自然さを感じないのである。

以上のように見ると、うさこちゃん絵本は絵がシンプルで文も短い「わかりやすい」絵本に見えながら、それだけで言い表せない特徴を持っていると言えるだろう。

1-2. 子ども向けの絵本として

中西・覚道によると、うさこちゃん絵本は大人の立場から推薦されることが多く、児童文学としても高評価を得ているが、子ども自身からみたらどうなのか、というどちらかというと批判的な考察をしており⁽⁹⁾、逆に大人からは低評価でも子どもから人気がある絵本として『ノンタン』シリーズを挙げている。このノンタンは現在も人気絵本であるが、1976年に出版されたときには大人からは不評が多かったという。実は、うさこちゃん絵本もオランダ本国で出版時には大人から不評であったにもかかわらず、子どもに受け入れられたという事実がある。

はじめての絵本『りんごちゃん』を1952年に創作し、その翌年に出版しました。・・・この『りんごちゃん』をふくめ、1957年までの4年間に7冊の絵本を作りました。・・・ぼくの絵は当時のものとしてはモダンすぎたのです。1950年代の子どもの向けの本といたら、大半は文が中心で、絵画調の挿絵がつくといったものでした。まだ字も読めないくらいの小さな子どものための絵本は見当たらなかったのです。そういう時代でしたから、このシンプルなスタイルは受け入れられず、中身の無いものと思われてしまったようでした。・・・でも子どもたちはちがいました。僕の絵本を気に入って、つぎつぎと手にとってくれたのは、他でもない小さな子どもたちだったのです⁽¹⁰⁾。

したがって、うさこちゃん絵本は、子ども向け絵本の大前提として、子どもに選ばれた絵本であるということを忘れてはいけない。

絵本は多くの場合、大人が子どもに声を出して読み聞かせるメディアである。「絵本は幼児に読ませる本ではなく、大人が読んであげる本です⁽¹¹⁾」といわれる。したがって、絵本の文章は黙読されるのではなく、音読されることが前提になっている。だからこそ、絵本の文章はたんに子ども向けに短く簡単になっているだけでなく、繰り返しが多く、リズムカルであり、韻を踏むオノマトペが多用され覚えやすく思いだしやすいという言った特徴を持っている。これについては、前項でうさこちゃん絵本がオランダ語でも日本語でもまさにそのような絵本であることを示した。

子ども向け絵本の特徴の重要な点として、松岡は「心がきょう感じ取ったことを頭が必ず理解する」⁽¹²⁾のが、子どもであって「こどもたちは、絵によって実生活での経験を確かめ、整理し、それを頭の中で再現します。それを繰り返して行うことによって、徐々に物事を抽象的に捉えるやり方や能力を身につけていく」⁽¹³⁾としている。子どもにとっての絵本は内容そのものを理解したり、覚えたりすることは二の次であって、その前に、心に響くもの、楽しい気持ちにさせるものであるということであろう。絵本の絵や内容が子どものイメージとして捉えられるために、あたたかさや安心感が大切なのである。ブルーナ自身も「誰かに何かを教えたり、押し付けるのは、どうも

嫌いな性格なのです。見ているうちに、色の楽しさにワクワクしたり、思わず数を数えなくなったりすることができる、そういう楽しみを第一に考えて（絵本を）つくります。・・・子どもにとって絵本は世界を広げてくれるもの。絵を見たり読んだりして心に響くものがあるから、自由にイメージーションを膨らませることができるし、その先にある何かに気づいたり、自分もやってみたい気分になったりするのです。子どものための絵本はそういうことが大事なんです。⁽¹⁴⁾」と考えている。

うさこちゃん絵本にはもちろん「大人の視点から描かれたものであり・・・自我が芽生えていない三歳以前の幼児に、常識や概念を伝えるしつけのための教育的意図が盛り込まれた絵本と位置づけるならば、それなりに了解される内容である⁽¹⁵⁾」との指摘もある。ブルーナ自身は何かを教え込もうという意図はないようだが、それをどうとらえるかは読み手側の受け取りにもよることである。とはいえ、子ども向けの絵本には、少なからず大人の子どものための願いが込められていることは自然なことであり、その意味でうさこちゃん絵本は子ども向けの典型的な特徴をもっているといえるだろう。

1-3. 動物絵本として

絵本には動物が登場するもの、動物だけが登場するものが多数ある。E. E. M. ロバーツは絵本に動物を登場させる目的には、動物そのものに子どもの興味を向けることと人間の代役を務めさせることがあるとしているが、矢野はそれだけでは動物絵本が子どもに愛される理由にはならないとしている⁽¹⁵⁾。うさぎやくまなどは絵本によく登場するが、子どもが赤ちゃんの頃抱きしめていたぬいぐるみの動物である。フワフワしていて安心感があり、自分の分身や友だちのような存在である。ねずみやひよこも登場するがそれらは小さくてかわいらしく、子どもが親近感を持つ動物である。その中でうさぎは跳ねる動物であり、子どもにとって飛び跳ねることは解放感のある経験であって、カンガルーやカエルなどとともに子どもにとっては魅力的なキャラクターなのである。

動物絵本に登場する動物は多くの場合頭部が体よりも大きく描かれており、それによって動物が幼体化されることで、子どもにとってより近い存在になる。そして本物の動物とちがって目を黒い丸目で描くことによってぬいぐるみや人形に近づけるという方法をとっている。

うさこちゃんもまさにこの技法で描かれており、大きな頭とまるい黒目がいつも子どもの方を見ていることで、子どもは自分を見つめ話しかけてくれているような気持ちになるかもしれない。そしてブルーナが主人公にうさぎを選んだのにはきちんとした理由があって、自分が幼いころ家の周りにいたうさぎと遊んだ記憶があること、そして自分の息子にも同じような経験があってうさぎが大好きであり、その息子に何かシンプルな絵を使ったお話しをしたいと思った時にうさぎが先ず思いついたというのである⁽¹⁷⁾。

以上のように見ると、ブルーナが絵本の主人公にうさぎを選んだのには彼なりの理由があったわけであるが、それが子どもに好まれる動物絵本の特徴を備えていたということになるだろう。

2. オランダの絵本としての特徴

「ブルーナさんの絵本は、オランダの風土そのもの。水平性と正面性が、正方形のちいさな本の中でとても純粋なかたちで表現されています」と松居直は表現しているが、確かに山がなくどこまでも見通せる平らな土地に整然と区画された畑や牧草が広がるオランダの国土との共通点を、この絵本は感じさせてくれる。(写真参照)



(左：『うさこちゃん びじゅつかんへいく』オランダ語版表紙、右：オランダの花弁園芸用畑 筆者撮影)

本節ではうさこちゃん絵本のオランダ的な特徴を整理した上で、これまであまり語られてこなかった子育てや教育の観点からうさこちゃん絵本の分析を試みる。

2-1. ディック・ブルーナ自身の思い入れ

うさこちゃん絵本の第1話である『ちいさなうさこちゃん』はうさぎの夫婦に赤ちゃんができて、その子うさぎがうさこちゃんであるというお話である。この絵本には天使が登場するが、西洋のお話であることを知っている私たちは特にそのことを不思議には思わない。一方、それ以外のうさこちゃん絵本のなかでキリスト教的な要素はほとんど見られない。しかし、ブルーナはオランダでは主流派のプロテスタント（カルヴァン派）家庭に育ち、彼をよく知る学芸員がその作品に彼の宗教観（＝勤勉で禁欲的な精神）がよく出ているという。うさこちゃん絵本が出版され始めた頃のオランダはいわゆる柱状化社会といって、宗教や思想が同じ人たちでコミュニティを形成する住み分け社会であり、取り立ててブルーナでなくても、そのような社会観が絵本にでていたかもしれない。

ブルーナはまた家族や家庭に対する愛着が強い。「ミッフィーのおじいちゃんやおばあちゃんを描く時、自分の祖父を思い浮かべます。どんな風に一緒に遊んだらうか、祖父の腕にどうやって抱かれていただろうかと⁽¹⁸⁾。」「幼い子ども時代の家庭のあたたかさは、その子の人生を勇気づけるもので、一生もって歩く大切なものだと考えています。⁽¹⁹⁾」このことも後述するオランダの家族観と共通するものである。

さらに、彼は子どもの日常（＝子どもが毎日の生活で経験するであろうこと）を大切に描いている。子どもの日々の生活の中には、非日常的な出来事や冒険のような子どもにとってワクワクするようなこともあるだろうが、それよりは平凡な日常生活のなかで起こりうる出来事を丁寧に描いている。それはちょうど日本の幼稚園が季節の行事や子どもが家庭では経験できない種々の体験を盛りだくさん取り入れているのとは逆に、オランダの学校ではそのようなことがほとんどないと似ているように感じられる。

2-2. オランダ絵本の翻訳者から見たうさこちゃん

ここでは長年にわたりオランダやベルギーの絵本を日本に紹介してきた翻訳家であり、自身も紙芝居や絵本の創作作家である野坂悦子の解説をもとにオランダ社会とうさこちゃん絵本の間をみる。彼女は「うさこちゃん」シリーズ絵本の編集協力者でもあり、自身のオランダでの生活に基づいて次の8つのキーワードから、この絵本全体を通して他のオランダ絵本と共通する「オランダらしさ」が表現されているとしている⁽²⁰⁾。①うさぎ、②王室、③パーティ、④美術館、⑤人種、⑥音楽、⑦赤ちゃん、⑧死生観である。この中から③、⑦、⑧のキーワードについて「うさこちゃん」絵本のどんなところにオランダらしさがでてくるか、確認してみることにする。

③パーティ：ここで主に取り上げられているのは誕生日パーティである。オランダでは誕生日は特別で、家族はもちろん友人知人の誕生日も忘れないための「誕生日カレンダー」があるほどである。そして、興味深いのが、誕生日のお祝いは決して子どもだけのものではなく、同時に、誰かに祝ってもらうだけのものではないということである。「誕生日になった子どもやその保護者がケーキやお菓子を持ってきて教室のみんなに配ります」と彼女の資料に記述されているように、誕生日はその年まで自分が生きてくることができた感謝を周りの人に知らせることによって、祝ってもらうという意味がある。そしてパーティの準備は楽しく、みんなが集まって楽しむ会ではあるものの、決して派手なことをしたり豪華なプレゼントをもらったりするだけのイベントではないのである。

⑦赤ちゃん：日本でもオランダでも出産は人生の大きな節目であり祝い事であるが、オランダでは現在でも家庭で出産することが一般的である。子どもが生まれる家庭は庭にコウノトリのオブジェを置いて出産を周りに知らせる。子どもの性別によってラスクにブルーやピンクのアニスの香りのするアラザンのようなものをかけたマウスシュ（＝ねずみさん、ネズミに見立てていると思われる）というお菓子がふるまわれ、『うさこちゃんとあかちゃん』の中で、うさこちゃんが生まれてくる赤ちゃんに小さなネズミを手作りするのもこれにちなんでいると考えられる。

⑧死生観：オランダは個人の意思を尊重する国であるからこそ、世界でいち早く安楽死法が成立した国である。身近な人との別れはつらいことだが、ただ悲しんだり、幼い子どもから遠ざけるものではない。死は誰にとっても身近なことであり、穏やかにその人との関係をつなぐことが大切である。『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』にそれがよく表れている。

このようにうさこちゃん絵本にオランダの社会背景が反映されているのは明確だと考えられる。次項ではその中で特に子どもにとっての親の役割、子育てや教育観に限定して、絵本内容を分析していく。

2-3. オランダの教育観とうさこちゃん

本項ではドイツとフランス、オランダの3国の家族や子育て観を比較研究したGramを参考に、うさこちゃん絵本に表出されているオランダの家庭や子育て、教育観を見ていく。Gramによると、オランダでは家族と家庭は大変大切なものであると意識されている。多くの時間とエネルギーを家族にかけているので、オランダはヨーロッパの中で家族をもっと強調すべきだという高いストレスがかかっていない唯一の国だという。稼ぎ手である男性と家族の世話をする女性と数名の子どもというのが典型的な家族構成であり、第1子誕生後数年は3分の2の女性は仕事をやめている。仕事を続けている88%の女性はパートタイマーに変更し、一方、男性は父親になると仕事時間を増やす傾向がある。このように欧米の中でもかなりの割合で性別役割分業が期待されている社会である⁽²¹⁾。保育所制度がほとんど発展せず、2000年以降に急速に発達したのもこの性別役割分業による。その一方で、このことは「男尊女卑」を意味しない。男女の役割は異なっても補い合うという考え方が浸透している。

このような家族観、ジェンダー観があるオランダで、子どもにとって親はどのような存在なのだろうか。最も重視されるのが「子どもにとっての第一の責任者は親・保護者である。」という考え方である。日本でも法律に記載されているごく当たり前のことがらであるが、オランダ人にとっては大変意味深い事柄である。周知の通り、オランダでは憲法で「教育の自由」が規定されており、それは親による教育の自由でもある。自分が保護する子どもにふさわしい保育所・小学校を親が選択しなければ、子どもは学校に通うことができない。親が子どもにとってふさわしい学校を選択する、選択する余地がなければ、そのような学校を設立できるということは長い教育闘争の末にこの国の親が20世紀初頭に勝ち取った権利であった。国による一律の公教育よりも、親の宗教や主義による教育を保障することがオランダの公教育の在り方となった。このような考え方が基本であるため、しつけが保護者の務めであることは当たり前であり、保育所や学校に子どもを送り届けるのももちろん保護者の務めである。

とはいえ、このことは親が子どもにとって反抗できない絶対的な存在であることを意味しない。大人の押しつけではなく、オープンな関係を通して子どもに自分の個性を発揮できるようにさせるのが保護者の役割である。また、隣国のドイツやフランスと比べて、学校の宿題よりも家事を手伝うことが期待されている。学校でも家庭でも、子どもに期待されていることは次のような点である

(21)。

(1) 子どもは個人としてみなされ、強い個性を発達させるべきである

(2) 子どもは社会的存在であるべきだ

(3) 子どもは心地よく、安心できるべきだ

(1) と (2) は一見矛盾するように見えるかもしれないが、そうではない。オランダ社会の興味深い特徴の一つとして「みんながマイノリティ」という社会であることだ。政治ですら、単独政党が議会の過半数を占めることはほとんどない。したがって、(1) の個性を発達させるのは、いわゆる「尖がる」ことではない。この国では「出る杭は打たれる」からである。(2) はあくまで、自分はそのままでよいのだという信念を育てるというようなことである。自分と人とを比較して勝負はしないが、とにかく隣人はどんな様子であるかを大変気にする国柄がある。大国に囲まれた中で情勢を見極めながら生きながらえてきた国であるからかもしれない。それが(2)を重視する姿勢につながるのだ。

以上のようなオランダ社会の家庭観、ジェンダー観、子ども観を踏まえて、うさこちゃん絵本を見てみよう。

うさこちゃん絵本には全編を通して親が当たり前のように登場する。祖父母やおばも登場する。家族の話の中で、親と同時に友達が出てくるものはほとんどない。友達は、学校やキャンプなどで出てくるだけである。幼い子どもに親がいて、それがストーリーに現れるのはごく自然なことであるが、お父さん（ふわふわさん）は常に働き手としての象徴である背広にネクタイ、お母さん（ふわおくさん）は家庭のことをきちんとして優しくおしゃれな存在というところが、性別役割分業を表しているといえる。その一方で、夫婦は互いが対等の関係であろうことは第1話『ちいさなうさこちゃん』からもわかる。まだうさこちゃんが生まれていない段階で、お母さんが買い物に行ったときの表現である。

えんどうはおくさんがたべるため　なしはふわふわさんがたべるため。

これをみると、買い物も目的は家族のためというより、自分には（自分が好きな）エンドウ、夫には（夫が好きな）梨という対等な表現が見て取れる。

個人の考えを家族に強要しない＝一人一人は違ってよい、という考え方も次のような表現から確認できる。『うさこちゃん びじゅつかんへいく』を例にとる。

あるひ おかあさんが いいました。・・・びじゅつかんへ いこうと おもうの。
いっしょに いきたいひと いる？

この表現を見て違和感を持った人は少なくないだろう。「みんなで美術館に行かない？」と誘うのが、（日本なら）普通の表現ではないかと考えられるからである。しかし、この表現は明らかにそうではない。お母さんが美術館に行きたいと思い、そこにいる家族に対して、だれが一緒に行くかと尋ねているのである。先ずどこかに行きたいという意味を持った個人がいて、家族であっても行きたい人や行きたくない人がいることが前提になっているような表現である。もう少し同じ本の内容を見ていこう。

・・・うさこちゃんは ちいさすぎるんじゃないかね と おとうさんがいいました。
ちいさすぎる？ どうして？ わたし もう おおきいよ。

ごらん と おとうさんがいいました。 このうさぎ おまえにそっくりだよ。
ちがうわ。 だって わたしはほんもので このうさぎみたいに あおくないもの。

上の囲みをみると、これも少し不思議な設定である。美術館に行くという、家族での、そして教育的にも意味のある外出に対して、子どもの年齢からお父さんが反対し、それに対してうさこちゃんが自分の主張をしているからである。下の囲みはどうかというと、お父さんの意見に対して、うさこちゃんはしっかりと自分の考えを述べている。これに対して、お父さんがどういったのかという続きはないが、それが自然な会話であることが、何事もおこらないことから察せられる。いずれにせよ、それぞれの個がきちんと向き合っていることがわかる設定だと考えられる。

別の内容からも、個人そのものを受け止める表現が見受けられる。『うさこちゃんとたれみみくん』の中で、先生が以下のように説明する部分である。

せんせいは いいました。 みなさんと ちっとも かわらないんですよ。
ほんのちょっとちがっているのは そのこのみみかもしれませんね。

この本は、いわゆるいじめに対してうさこちゃんが向き合おうとする話であり、そのことに着目されることが多いが、この先生の説明にも、もしかすると「えっ？」と思った人もいたかもしれない。日本で転校生が来た時に、先生がその子の違っている部分をわざわざクラスに言うだろうかということである。皆さんのなかで、もしこの先生の言葉がきっかけになって、転校生のダーンに対する「たれみみくん」というあだ名が広がったのだと思った人がいたら、おそらくそうではない。先生のこの説明は、ダーンをそのまま認め、それをクラスに明言しただけなのだ。

子どもは家庭でも学校でも、安心して居心地が良いことが大切で、そのような雰囲気の中で、一方で一人一人が尊重されながら、もう一方で社会的存在であることが求められる。そのためには親の役割が重要であり、親は子どもに対等に向き合って、ダイレクトにシンプルに自分の思いを伝え、子どもはそれを受け止めつつ、自分の考えを見つめ育んでいく。うさこちゃん絵本にはこのようなオランダ社会の子育て観が如実に表れている。もちろんこれらの子育て観は「理想形」であり、現実の家庭や学校では多くの課題もある。しかし、ブルーナが子育てし、その孫を見守ってきた1960年代から現代にいたる時代のオランダ社会の底流にはこのような子育て観、教育観があり、この絵本には一貫してそれが表れていると考えられるのである。

おわりに

今回の分析の補足として、同タイトルのうさこちゃん版とミッフィー版では、訳にどのような違いがあるのか確認してみた。『うさこちゃんのがみ』『ミッフィーのがみ』（原著はともに de brief van nijtje）の中から、特徴的なページをとりあげる。この話は、キャンプに行っているうさこちゃんが家族に書いた手紙の内容である。（グレーの部分が分かりやすく異なっているところである。）

うさこちゃんのがみ（福音館）	ミッフィーのがみ（講談社）
すぐちかくにみずうみがあるので、よくおよぎにいきます。わたしは5かいいきました。あーはは7かいもいきました。	ちかくのみずうみになんかいもおよぎにいました、アギーは7かいもいきました。わたしよりずっとたくさん。
ここではごはんがとてもおいしいです。なんかもおいしい。いつもでるちいさなまるいパンもとてもおいしい。	キャンプのばんごはんはとってもすてきです。ちいさなまるいパンもついてたの。おいしかったわ。
ね、わかるでしょ、わたしがここでとてもたのしくすごしているってことが。こころからあいをこめて、うさこより。	これでおてがみはおしまいです。ミッフィーからだいすきよのキスをたくさんおくります。

湖に泳ぎに行く回数について、私は5回だったけどアーハちゃんは7回だったという、うさこちゃん版では単純な報告が、ミッフィー版では自分とアギーを「比べる」表現になっている。個人的な見解になるが、オランダでは、ひとと何かを比べるということはほとんどないので、ミッフィー版のイメージはなじまない。また、うさこちゃん版で「いつもでる」まるいパンというのは、オランダでは家でもレストランでも同じように出てくるまるいパンのことで、決してキャンプの食事にだけ「ついてた」わけではない。原著に忠実なのはうさこちゃん版なのだろう。しかし、日本の読者にとって一読して耳になじみやすくわかりやすいのは、ミッフィー版である。現在、うさこちゃんよりのミッフィーが親しまれている一因には、このような点もあるかもしれない。しかしながら、うさこちゃん絵本が子どもの頃好きだったという酒井が「その小さな違和感もブルーナの絵本の魅力だ」⁽²³⁾と言っているように、この独特の表現がうさこちゃんらしさを語っているのである。

今回の分析をもとに、読み手や子どもたちにオランダらしい価値観を意識してほしいとか、この絵本のオランダらしさを理解してほしいとかを願っているわけではない。ただ、「ほのぼのした暖かさ、楽しさが盛られているが、特別のヤマ場も盛り上がりもない」「大人の視点から描かれたもので

あり、決して逸脱することのない常識的な内容」と批判的に評された⁽²⁴⁾ こともあるこの絵本が、実はオランダらしさを投影したオランダの絵本であるゆえにそうであるということを少しでも知っていただけたら幸いである。

注

- (1) 日本では講談社から出ている出版物などについてはミッフィーが使われ、近年ではこちらのほうがよく知られている。本書では基本的に福音館書店が出版当初から日本で用いているうさこちゃんを使用する。筆者自身、オランダ語の原語である Nijntje のニュアンスを、うまく日本語で表現できている言葉だと考えるからである。
- (2) シリーズ 33 作品目だと日本ではされている、『うさこちゃんとふがこちゃん』はうさこちゃんの耳をつけたぶたのふがこちゃんが主人公なので、ブルーナ自身はうさこちゃんのシリーズ本だとしていない。
- (3) うさこちゃん（ミッフィー）を「知っている」「すき」という学生に対して、どんなお話が好きか聞いたところ、お話しそのものはほとんど覚えていないという学生ほとんどであった。
- (4) 本稿の参考文献であげたような絵本の月刊誌MOEでの特集号や、AERAのような一般誌での特集など多数。
- (5) 矢野、34.
- (6) 講談社、100.
- (7) 森本、24-25.
- (8) オランダでは、誕生日やクリスマスに家族や親しい友人に向けて、相手の良さや特徴を示すような4行詩を送り合う習慣があり、その時も、文尾が韻を踏むように考える。パーティの席でその詩を披露したりするが、その習慣を思い出させるものである。
- (9) 中西・覚道、224.
- (10) 講談社、54-55. 余談であるが、やなせたかし著『あんぱんまん』絵本も、初版時は、あんぱんの頭がかじられるという絵が残酷だとして、出版社から差し替えを命じられたが、子どもたちから徐々に広がっていったという経緯がある。
- (11) 松居、3.
- (12) 松岡、26.
- (13) 松岡、40.
- (14) 講談社、76.
- (15) 中西・覚道、230.
- (16) 矢野、46.
- (17) 講談社、58.
- (18) 同上、60.
- (19) 同上、98.
- (20) 野坂、講演会資料より。
- (21) Gram、147.
- (22) 同上、170.
- (23) 月刊MOE(2015)、6. この「違和感」は、子どもにとっての海が日蘭で異なるのではないかと、酒井が子どもの頃無意識に感じていたことを示す。
- (24) 中西・覚道、228、230.

引用·参考文献

- カーサブルータス特別編集（2014）【完全保存版】「読み継ぐべき絵本の名作 200」、マガジンハウス。
- 講談社（2005）『ディック・ブルーナ ぼくのこと、ミッフィーのこと』、講談社。
- 谷口秀子（2000）「子どもの絵本と社会—Curious George の文明観—」、言語文化論究 12、29—34 頁。
- ディック・ブルーナ（石井桃子訳）（1964）『ちいさな うさこちゃん』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（松岡享子訳）（2005）『うさこちゃんとあかちゃん』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（松岡享子訳）（2008）『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（松岡享子訳）（2008）『うさこちゃん びじゅつかんへいく』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（松岡享子訳）（2008）『うさこちゃんとたれみみくん』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（松岡享子訳）（2009）『うさこちゃんのがみ』、福音館書店。
- ディック・ブルーナ（角野栄子訳）（2004）『ミッフィーのがみ』、講談社。
- 中西一弘・覚道知津子（1992）「子どもが選択する絵本と大人が選択する絵本に関する一考察—幼児絵本におけるマンガの手法の問題を中心に—」、大阪教育大学紀要第 V 部門第 40 巻第 2 号、223-238 頁。
- 野坂悦子・松岡希代子監修（2007）『オランダ絵本作家展』、産経新聞社。
- 野坂悦子「オランダとベルギーの本の世界」（大阪国際児童文学館を育てる会 2016 年度児童文学講演会、2016 年 7 月 16 日）配布資料。
- 美術手帖（2010）vol. 62 No. 935、美術出版社。
- 松岡享子（1987）『えほんのせかい こどものせかい』、日本エディタースクール出版部。
- モエ 5 月号（2010）vol. 32 No. 5、白泉社。
- モエ 5 月号（2015）vol. 37 No. 5、白泉社。
- 森本俊司（2019）『ディック・ブルーナ ミッフィーと歩いた 60 年』、文藝春秋社。
- 矢野智司（2002）『動物絵本をめぐる冒険 動物—人間学のレッスン』、勁草書房。
- Malene Gram（2003）*Grounds to Play Culture-specific Ideals in the Upbringing of Children in France, Germany and the Netherlands*, Peter Lang AG.
- ウィキペディア（ja.wikipedia.org/wiki/ミリオンセラーの絵本一覧、20210212 情報取得。）
- 松居直「絵本の与え方」リーフレット（<https://www.fukuinkan.co.jp/pdf/ataekata.pdf>、20210130 情報取得。）